

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第134回

「Litoral & Off Shore——海と陸とのあいだ」 : 海洋アジア Oceanic Asiaにむけた国民国家 制度の解体と海賊行為の問い直しと ——8年ぶりにAAS北米アジア学会総会に参加して・

稲賀 繁美

(いなが しげみ/国際日本文化研究センター, 総合研究大学院大学教授, 放送大学客員教授)

*ASS (ASSOCIATION FOR ASIAN STUDIES) 年次総会。会期は2019年3月21-24日。会議の各分科会の要旨は,
<http://www.asian-studies.org/Conferences/AAS-Annual-Conference/Conference-Menu/Special-Events>を参照
されたい(冒頭の参照番号が分科会番号に相当する)。

北米合衆国コロラド州デンヴァーで開催された、北米アジア学会総会に参加した。おりから平成の終焉を迎えた世界では、欧州でも北米でも国民国家の制度的破綻が明らかとなり、海域や宇宙さらには月を含む資源の恣意的な篡奪、くわえて電子仮想空間における財の海賊的掠奪が、日常茶飯な国家的事業あるいは多国籍で超国家的な金融的野心と絡まって膨張を遂げている。学術の世界でも、こうした時流への目配せや抵抗戦術に、焦点が移行しつつある。この見地より、以下、臨席した分科会に限り、時間順に講評を試みる。各パネルでの発表の要約というよりは、評者の個人的意見に終始することをお断りする*1。

3月21日 Day One

初日夕刻。

15: Heisei Becomes History: The
Relevance of the Imperial Reign Calendrical

System in Twentieth-First-Century Japan
(Noriko Murai, Alice Tseng, Franziska
Seraphim, Jordan Smith)

平成の終わり。それは、天皇制に関する年号がもはやイデオロギー的な諍いすら惹起しなくなり、政府機関でも電子媒体では西暦への移行が図られるに至った時代である。とはいえ、平成が「失われた30年」に重なるのならば、その期間を生涯の壮年期として過ごした世代にとって、自分たちの人生とは何を意味することになるのか。バブル崩壊から平成の終焉まで、自分の30台から60台とは何だったのか。「終焉」は否応なくperiodization時代区分という意識の区切りをもたらさずにはおかない。国際的な日本研究という見地からすれば、平成の終わりとはDonald Keene, Howard Hibbettに先立ち、国際日本文化研究センター創設者、梅原猛を見送った年であり、その直前にはRonald DooreやHugh Cortazziが世

を去った。ひとつの時代が閉じたという虚脱感は、30年前の昭和の終焉の空虚感にも重なる。1970年大阪万国博覧会の立役者だった堺屋太一も昨年逝去。平成を忌避した作家、橋本治は近未来空想科学私小説『九八歳になった私』(2018)を遺作に残した。明治維新150周年は政府の旗振りにもかかわらず不発に終わり、次の時代は1964年の夢の再生よろしく、2度目の東京オリンピックを画策している。だが茶番の印象は覆い難い。AASデンヴァーのパネルのひとつの題を借りるなら、列島に自閉した「日本研究」そのものが国際的な視野の欠如ゆえに、学術上の絶滅危惧種として、終幕を迎えようとしている。

3月22日 Day Two

42: The Swirling Winds: Cultural Exchange in East Asia, 8th–16th Centuries

国民国家という、たかだか2百年に満たない「近代」の枠組みを、暗黙のうちに過去へと投影する歴史観は、最近抜本的な問い直しを迫られている。シカゴ美術館に所蔵されている作者不詳の龍の水墨画一幅は、刻印から判断するに、雪舟あるいはその贋作かと推定される。従来、雪舟の入明は、大内氏の庇護に頼った私的な行動とされてきたが、明の首都の外交を司る役所の壁画揮毫が東夷より入明した画僧に委ねられた事実は、そこになんらかの国家的水準での外交関係の反映を想定することを許すものではないか。龍の図にまつわる権威は、その贋作の流通によって、華夷の秩序を顛倒させる(Huiping Pang)。それに先立つ時期、朝鮮朝では明への冊封に儒教社会の秩序を証拠だてる理論が彫琢され、清代に入る

や、北狄による征服王朝への服従には肯しない正統意識が頭をもたげる。『熱河日記』の著者、朴趾源 Pak Chiwon (1737–1805)に典型的な朝鮮の中華意識である(Ji-Young Lee)。ところが隣国の日本では、將軍・足利義満は、明への朝貢による華夷秩序に準拠しない外交関係を、明使の応接において断行する。その延長上に、内乱期の日本から雪舟が入明を果たした。そこには鎌倉期以来の禅僧の往来という背景も無視できまい。それより遥か数世紀遡る東亜への仏教伝来は、インドからカシミールを経由し、北魏の様式は韓半島を経由して法隆寺に至り、華嚴經の毘盧舎那仏■01は雲崗や龍門への伝播の延長で奈良の東大寺にまで到来する(Denize Leidy)。20世紀初頭、岡倉天心は英文出版による『東洋の理想』(1902)で漢代の書籍を根拠に、中国からガンダーラへの仏像の伝播・将来を主張したが、それは北魏などの石刻仏の年解読が進



■01 龍門の石窟 川端龍子《洛陽攻略》

むや、数年のうちに無根拠な時代錯誤の
謬見として西欧の学会から一蹴された。
文物や思想の文化伝播の周辺部や末端地
域に、かえて逆転した正統意識が芽生
える。その逆説が、千年単位の東アジア
文化史論のうねりのなかから、ゆくりな
く浮上してくる*。(筆者・稲賀は、2日目朝一
番のこのセッションの司会を組織者から依頼された。)

91: Outlaws, Spies, and Detectives in the Japanese Empire : Detective Fiction in Japan and Colonial Korea

秩序の綻び目には無法者や間諜が跋
扞し、現実と虚構との狭間には探偵小説
や犯罪小説と呼ばれる文学が開花する。
朝鮮併合期、とりわけ1920年代の日本列
島や半島に登場した都市小説は、植民地
行政の副産物としての特性を濃厚に宿し
ている。「怪人二十面相」の江戸川乱歩
が日本の代表なら、朝鮮では金南成Kim
Nae-seong (1909-1957) に指を屈するのが
定石だろう (Jooyeon Rhee)。「楕円形の肖像」
といえ、エドガ・アラン・ポーの
短編そのままの題名だが、Doppelgänger
の頻出には、植民地社会の二重構造の表
裏の綾が、幾重にも反映していよう。

30年代の京城には「京城探偵小説倶楽
部」なるものが設立される。そこからは
「女スパイの死」(1931)、「3つの玉の秘密」
(1934)といった連載物が生まれるが、これ
らは、現在では誰かも不明な、筆名を使
った複数の日本人たちが、リレーで書
き継いだ作物であることが知られてい
る (Jaejin Yu)。職業作家ではなく、植民地
官吏や半島に渡った左翼崩れを含む日本
側高等遊民執筆陣による趣味としての創
作活動を想定できる。だがその正体は、
探偵小説の中味顔負けに、人物の特定を

許さない。作中には韓国人が人格を伴っ
た姿では現れない。この不在も著しく有
徴であるはずだ。日本語教育を受けた朝
鮮人も潜在的読者だったはずだが、探偵
物の受容実態はなお解明を待たれる。無
論、玄洋社の杉山茂丸の息、夢野久作も
この流れに掉さず (Morio Yoshida: 吉田司雄)。

だがそれならば、ここにエロ・グロ・
ナンセンスの時代的兆候を読み取るだけ
では、いかにも不十分だろう。フランス
ならアルベール・メンミが説いた植民者
と被植民者との淫靡なる相互依存は、ス
パイや密告の自己同一性の危機とも表裏
一体。カミュの『異邦人』を、殺人の被
害者となった被植民地家族の弟の側から
なぞり直す脱植民地文学作品も知られて
いる。カメル・ダーウド著・瀬戸聡訳『も
うひとつの『異邦人』：ムルソー再捜査』
(水声社、2018)。『ジェイン・エア』を裏
側から読み替えたジーン・リースの『サ
ルガッソーの広い海』へのガヤトリ・ス
ピヴァックの批評に端を発する「二次小
説」読解の手法が踏襲されている。乱歩
得意の「双子」現象へのこうした脱植民
地主義・比較文学的接近もまた「マラー
ノ（「プタ」つまりイベリア半島の改宗ユダヤ人）文学」
の大日本帝国版の変種たる「チョッパリ」
文学（四方田犬彦）に発現した「変態」現象
を解析するのに有効なはず。佐藤亜紀の
『バルタザール』物が、双頭の鷲を頂く
オーストリア＝ハンガリー二重帝国を舞
台としてこの系譜を引く、奇想天外な欧
州歴史伝奇物語なのも自明だろう。

現今の世界秩序は、その理念的根拠を
失い、漂流状態を聞いている。今回のデ
ンヴァーにおけるAASでは、その影響も
顕著に窺われた。一方では海賊行為に関
する地政学的あるいは歴史的研究が多数

出現し、他方では満州地域の歴史的再検討が多角的に遂行される。どちらも一路一帯を標語とする中華人民共和国の膨張姿勢を反映しつつ、バックス・アメリカナの自己崩壊的な終焉という国際情勢への本能的な学術的対応でもあるだろう。

114: Smuggling, Violence, and State in East Asian Maritime World

China's War on Smuggling: Law, Economic Life, and the Making of the Modern State, 1842-1965 (Columbia University Press and Study of the Weatherhead East Asian Institute, 2018) の著者、Philip Thai を司会と討論者に招いた、きわめてよく組織されたパネル。まず司会者が欧米での近年の海賊研究を大西洋沿岸からカリブ海域を包含して要領よく紹介する。ついで視点を東アジアに移し、まずは渤海湾、沿海州を中心に明と朝鮮との16世紀における海盜行為に対する取り締まり規則を比較する (Jing Liu)。いわゆる前期倭寇は、もとより国籍不明の混合集団だったが、倭銀の朝鮮半島への流入には、冊封体制下で明への朝貢に応じる必要と、半島では銀を産出しないという公式見解との矛盾が背景にある。禁銀の建前と実際の需要とに起因する密貿易、日本側と現地商人との共謀、儒教倫理によってこの実態を繕う公文書。これらの錯綜をどう解釈するかは解釈問題も介在する。さらに倭銀は明ではなく女真族にも流出し、「華夷変態」を現出する。日本では村井章介『世界史のなかの戦国日本』(ちくま学芸文庫) が先鞭をつけた領域であり、先駆的な古典としては田中建夫『倭寇』(1982初版) がある。

またここでは取り上げられなかったが、

日本戦国時代、いわゆる後期倭寇の時期には、鉄砲の需要と、火薬製造に必要な硝石や硫黄の交易をめぐる密貿易を含む駆け引きが、時代を牽引する。当時の堺は鉄砲生産で世界史的にも突出していたからこそ「東洋のヴェニス」の異名を取った。伊達政宗の仙台藩や島津家の薩摩藩は、織豊政権や成立過程の徳川幕府と裏を掻き合う策略を巡らしていた(平川新『戦国日本と大航海時代』中公新書, 2018, 上垣外憲一『鎖国前夜ラプソディー、惺窩と家康の「日本の大航海時代」』講談社メチエ, 2018, 第4章ほかの斬新な仮説は、文献史学からはなお批判を受けているが検討に値する)。

同時期の16世紀中葉から17世紀にかけての揚子江デルタ地帯、すなわち江南に視点を移すと、後期倭寇が視野に入る (Sunkyu Lee)。その中核を担った王直 (~1560) が平戸に本拠を置いたことも周知の事実■02。その近傍に三浦按針こと William Adams (1564-1620) の屋敷も残る。さらに鄭芝龍 (1604-1661)・鄭成功 (1624-1662) 親子の周辺ー日本人を母とする成功も生地は平戸ーと清側の海軍の対応 (Kyunsoo Chae)。詳細は省くが、清朝側は鄭氏集団に譲歩を見せる一方、その内紛に機を捉え、鄭氏集団からの投降者や逃亡者を再利用して切り崩しを図り、それが康熙年間には、清側の水軍へと変貌を遂げる。その典型が施琅 Shi Láng (1621-1696)。福建の清国水軍を率い、鄭氏打倒と台湾遠征に功をあげた武将として著名だが、彼も元来は鄭芝龍の配下だった。さらにアヘン戦争直前まで時代を下ると、独立まもない北米合州国が広州十二行 (長崎の出島とは桁違いの交易施設) に進出を果たす経緯が見える (Laurie Dickmeyer)。グローバルな世界経済の形成過程で中国の演じた役割を捉える試みは、東アジアの文献学



■02 王直の肖像（平戸市）

的地域史を一挙に世界史へと押し広げる。統計上の換算の面倒や、公式記録を優に凌駕する密貿易の実態把握には困難が伴うが、このあたり、原文史料も自在に扱え、北米で研練を積んだ中国や韓国出身の若手の学者たちの独壇場、という印象が濃い。

165: Rethinking Intermedial Aesthetics: Art in the Age of the Expanding Cultural Market in Japan and Beyond, 1870–1940s

第2日午後最終のこの時間帯は文化間翻訳、文化交流における舞踊や藝術、海賊行為、帝国の美学と政治などの分科会が多数並列し、選択に困惑した。筆者は旧知の発表者の登壇する分科会ではできるだけ避け、未知の研究者の発掘を旨としてきた。だが今回は、勤務先の海外 networking 形成事業の一環としての出張・大会参加という名目もあるため、それに関連する登壇者が多数会する本分科会に出席してみた。

明治末から大正にかけての時代には美術市場の構造におおきな転換が見られ、商業美術の擡頭へと向かう。それを説き明かす鍵となるはずの、表具屋や紙商あるいは質商がいかに美術産業に関わった

かの社会学的な調査は、比較的に遅延してきた (Eriko Tomizawa-Kay)。それは錦絵からの脱皮という産業構造の変革にも関係するが、そのなかで京都出身の今尾景年は巨大な絵手本を刊行しており、それは民国期の中国で版行・再版され、人気を博す (Stephanie Sue)。この時期の美術は日本列島の内部のみでは把握できない力動性を発揮している。竹久夢二■03の場合、新興美術とよばれた広告産業の黎明



■03 竹久夢二 「セノウ楽器」楽譜

期に活路をみだし、とりわけ「セノウ楽器」など楽譜の装丁に大きな仕事を残す。西条八十とともに詩人としても絶大な人気を誇った夢二だが、一世を風靡したその「夢二調」楽譜装丁の記録は、必ずしも完備されたかたちで保存収集されてはいない (Kendell Brown)。夢二の周辺には、同時代、創作版画から出発して装丁家として大成する恩地孝四郎や建築意匠で知られる斎藤佳三、邦楽家の山田耕作、舞踊の伊藤道雄から石井獏、洋画家の南薫造や陶芸家の富本健吉らも出没する (Meghen Jones)。『何が彼女をそうさせたか』(1930)の「傾向映画」で著名になる鈴木重吉 (すずきしげよし: 1900-1976) など、当初は夢二の近傍に姿を見せていた。

以下はToshio Watanabeの討論に触発されての稲賀の蛇足だが、木村直恵には『青年の誕生』と題する研究がある。これとは別に内田樹も「青年」という表象が1890年代誕生の世代を特徴づけていることを『困難な成熟』で見事に解析している。漱石が『三四郎』で描いた世代だが、かれらの営みを、国籍を越えたintermedialな創作として再評価し、その交流網と相互作用を復元する試みである。ちなみに一昨年、竹久夢二学会が発足している。筆者は最後にそう付け加え参加者の入会を促した。

3月22日 Day Three

188: Oceanic Asia: Maritime History and the Edges of Area Studies

3日目朝のこの分科会は、今日の学術的関心の方向と、そのなかでの日本の地政学的位置を、きわめて克明に炙り出す。会場で電子機器を用いた質問を受けつける運営方針も、昨今の流行を先取り

する。まずPrasejit Duaraが大洋を用いて従来の国民国家の空間的枠組みと歴史編成を解体する斬新な提言。体制の枠組みよりも海洋を往来する交通に重点を置く発想であり、表層の海流と深層水の循環、生態系に生かされている生物の観点からの世界史の再把握、さらに昨今の気象変動にも大洋の復讐の姿を、比喩ではなく現実として捉える志向。私事ながら海洋史観ならざる海賊史観を唱え、気象学climatology、地学geology、さらには大洋学oceanologyを人文学に連結することの必要性を主張してきた筆者としては、まさに賛同を隠せない哲学的な姿勢表明であった。国際法を専門とするAlexis Duddenは沖縄周辺の海域をめぐる利権や国境紛争を取り上げ、日本の主張する排他的経済水域といった概念を批判した。これは3海里から12海里、さらにはチリの200海里へと拡大を遂げた領海規定、その裏面としての公海high sea概念が今日の国際関係において抜本的な再検討を要する状況を裏書きしているはずだ。Stefan Hübnerはフクシマ以降の科学技術の動向として、颱風や地震、津波にも対波性のあるという触れ込みのロシアの水上浮揚原子力発電所や、中国が開発し、大洋進出をもくろんでいる巨大な水上魚類養殖船などを実物写真ともども紹介し、海洋開発の将来への展望と領海侵犯の危険性に言及した。

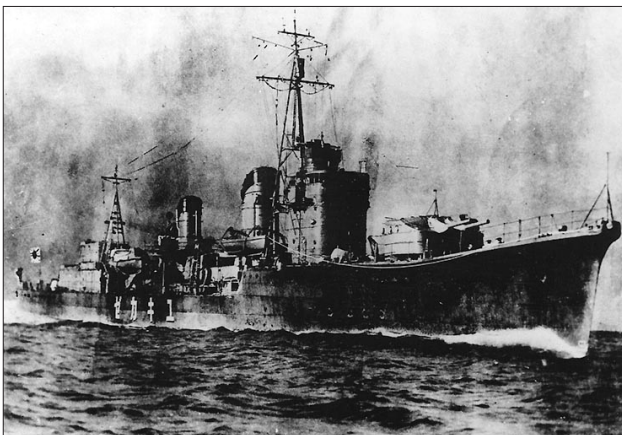
Satsuki Takahashiはフクシマ原発事故の発生地点が北からの親潮と南からの黒潮との合流点に当たることに向け、原発の余熱で魚卵の孵化施設や生育工場が設置されていたことの地政学的皮肉を指摘する傍ら、ポスト原発として洋上に浮遊する巨大風力発電施設の実験な

どが、必ずしも成功を収めてはいない現状を批判的に検討した。思えば常磐地域は、東京大都市圏の後背地として、炭鉱の閉鎖とともに原発誘致を進め、電力供給源としての役割を負ってきた。ポスト・ヒロシマのエネルギー文明の末路が、立ち入り禁止地域とその太平洋沿岸海洋の汚染に集約されている。

Brett L. Walkerは日本海軍で幾多の修羅場から生還した「奇跡の駆逐艦」「雪風」■04の運命に事寄せ、敗戦後、帰還船として活躍した後、台湾国防軍に編入されたこの軍艦の生涯のうちに、洋上の生態学を要約してみせた。太平洋戦争は、自由主義圏対ファシスト勢力のイデオロギー対立に還元できるような、欧州第二次世界大戦の付属的派生ではなく、石油他の天然資源を争点とする海洋覇権闘争であった。そのことは雪風の戦跡航路の復元からも納得できる。

各報告者の発表は各回6分に限定され、このあと縦横の討論が開始された。以下は筆者のその場の感想に限定するが、①艦船の運命は文明の比喩となる。日露戦争でロシアより捕獲され、済州島から朝鮮

労働者を大阪に運搬した靖国丸や、戦前には移民船として活躍しながら大戦で海の藻屑と消えた多数の民間輸送船。それらの生涯を辿る作業は、大洋アジアの文化史を描くうえで基礎作業となる。②これはまた海洋的想像力とも密接に関連する。かわぐちかいじ『沈黙の艦隊』の描いた原子力潜水艦ヤマトは、なお冷戦末期の時代設定という制限を脱していないが、主権国家に対して治外法権を主張する海賊船として、海洋における国際秩序の常識に疑問符を突きつけた。③とすれば井上ひさしの『ひょっこりひょうたん島』■05はどうか。幼児向きTV番組とはいえ、そこには敗戦後の日本列島への風刺があり、それはまた沖縄や石垣島、さらには与那国島、お好みなら魚釣島や竹島＝独島までへも縮小する同心円を描いて、島嶼地勢学の突き詰めた直喩をなす。海洋をあてどなく漂うこの島国には、悪徳政治家も海賊も保安官も居住しており、ときに外部からの篡奪者も登場し、火山や地震からも免れぬ地理的条件も具備している。だが地図上に固定できない漂流物として、その主権や領土意識は、(福島



■04 旧日本海軍 駆逐艦「雪風」



■05 井上ひさし『ひょっこりひょうたん島』

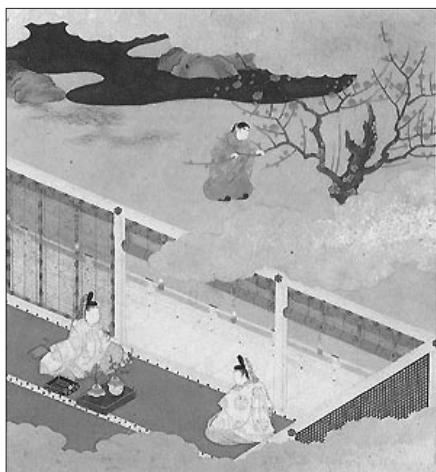
を強く意識させる)『吉里吉里人』の場合とは見事に表裏をなす。④煎じ詰めれば、海洋についてきちんと考えるには、海事のみならず海賊行為を視野から除外するわけにはゆくまい。それは自明視されがちな既存の「公海」概念の問い直しに通じ、酒井直樹の主張する「地理学的想像力」の彼方に「地学的想像力」までをも召喚する。なぜなら陸中心の領有権問題を越えて、国境を越える大気や海水の循環による汚染の拡大、地震の原因となるプレート移動といった地球の広義の生態系の基礎までもが、否応なく視野に入ってくるからである。

ここまでの議論を集約して、組織者のIan Millerが発表者に一言ずつの提言を求めた。一步、海に向かって足をすすめてみよう。そこから世界観は変貌を遂げる。海辺に佇む。そこで潮の満ち引きとともに思索を紡ぐ。大洋の終わるところに舟というヒトの住処が始まる。海に對峙し、大洋を仲介として、ヒトは人界の果てに自らの臨界を悟る。地球の年代記に人類の刻印が残される時代を迎えればこそ、地球が繊細な宇宙船に過ぎないと

いう認識も育まれる。海岸に臨み、海洋を仲介してこそ初めて、地域を跨ぐ学術にも開眼する。そして地上生物により搾取されてきた海洋生物の生存権も視野に入り始める。海を征服すべき敵対者とみるのではない。海への謙虚さを母体としたポリネシアの天測航海術や、資源との維持可能な共存といった海の掟への再評価が、ここに始まる。

228 : The Impact of Trade of Daily Life in East Asia, 960-1600

ここまで海洋アジアの輪郭を現代史の文脈で検討してきたが、そこで過去の海上交易を振り返るとどうだろうか。意外にも新鮮な視野が開けてくる。座長はかつてバブル経済期に*Japan as Number One*によって日本で異常なまでの流行をとった、いまや最長老のEzra Vogel。この領域は初心者なのでお勉強を、という低姿勢が好感を呼ぶ。894年の遣唐使廃止で日中間の外交は中断した。だが交易はこれとは反対の隆盛をみる。まず香料諸島に由来する沈香が中国経由で日本にも将来され珍重される(Valerie Hansen)。『源氏物語』■06の明石の姫君の裳着を思い出してもよからう。衣に香を焚き込める「薫衣」も知られるが、「香合わせ」もまた『源氏物語』と縁深い。逆に日本産品が中国で珍重される例も知られる。元から明代の中国では日本の扇子が流行した。折りたためる扇子は日本の発明ともされるが、杭州では「真倭人」から購入したものが真なる扇子として重宝された、と漢詩にも歌われる(Yiwen Li)。明を建国した朱元璋も倭扇に言及しているが、中国は夏でも暑くはないので扇など不要、と強弁をしていたりする。朝貢の献上品



■06 「源氏物語画帖／梅枝」 徳川美術館蔵

として需要があればこそ、かえって忌避しようとした気位の高さが窺われる。14世紀から16世紀にかけて倭寇が被害を齎したことは、すでに触れたが、かれらは異国の衣装に変装する策術に訴えたことが、高句麗の記録に残る (Peter D. Shapinsky)。自国の反乱居留民がわざと倭人を模した服装を纏ったり、逆に日本からの襲来者が高句麗の服装に変装して出自を隠したり、朝鮮半島沿岸の漁民が、海賊行為を働いたあとに、わざと倭人の衣類を捨てて擬装する、といった虚実入り乱れた

costume playが展開された。倭寇図鑑での倭人の藍染めの衣装も、こうした背景を考慮して読み解かねばなるまい。

討論者のRichard von Glahnは扇子についての洪武帝の悪口の理由として、風を起こすのが皇帝の役目だったから、日本の扇子にお株を奪われてはマズかったのでは？との愉快的な推測を述べ、香木については、同時期の世界経済は杭州を中心に東南アジアと日本とを巻き込んでいた、と観察した。宋の銅銭が鎌倉時代の日本で流通していたことは、発掘から広く知られるが、1253年に鑄造された鎌倉の大仏■07の青銅の組成は宋銭の青銅組成と正確に同一であり、ここにも宋と日本との交易の証拠があるという。

E.Vogel はこれらの議論を受け、遣唐使廃止後の日中貿易を要約して、私的商人、博多や寧波の徴税役人そして政治や貿易にも手を下した僧侶たちを交易の担い手として分別した。最後に蛇足だと断りつつ、中国では、兵への支払いが滞った際、香木で建て替えたという事例にも言及した。総じて具体的な史実が正確な史料とともに示され、和気藹々たる雰囲気



■07 鎌倉の大仏

270 : Botanic Gardens and the Mastery
of Nature : Nation, and Environment in
Southeast Asia

同じような興味から、続いて東南アジアの植物園に関するセッションに出席してみた。だがこれは残念ながらいささか期待切れ。最初はインドネシア・ボゴールのBuitenzorg Botanic Garden■08とそこに分類学の知識を導入して組織的な植生を実現したJohannes Teysmannの履歴 (Luthfi Adam)。つづいて1906年に開催された農産・植物博覧会をめぐっても英帝国下のシンガポールとマレーシア (Timothy Barnard)。さらに植民地独立後のインドネシアはジャカルタにおけるUNESCO主導のField Science Cooperation Officeの沿革 (Andrew Goss)。最後は19世紀の蘭領インドネシアにおける薬学知識の展開 (Gani Jaelani)。討論者はSuzanne Moon。おもしろくないはずはないのだが、発表者は自然科学系の研究者なのか？、特定の特異な植物品種の経歴や歴史的意義について蘊蓄を傾けるでもなく、視覚化された資料の提示に配慮するでもなく、当時の自然誌や中国の本草学との関係への

科学史的な関心があるわけでもなく、出島のシーボルトほかの植物学者のプラント・ハンティング (白幡洋三郎『プラント・ハンター』ほか参照) にも興味はなく、第二次世界大戦期の日本の介入 (植物学者・昭和天皇) についてもご存じなく、という調子で、淡々たる論文読み上げと内輪の議論からは、一向に熱帯植物園の世界文化交流史上歴史的意義が具体化しなかった。

同時刻にはMay 4つまり、1919年の5.4運動に関するパネルも設けられていた。百周年もあって中国出身の研究者も含め、この話題には複数の分科会が見られた。思い返せば朝鮮では3.1独立運動、中国では5.4運動、その間4月13日にインドはアムリットサルで虐殺事件が発生している。いずれも第一次大戦が終結し、ヴェルサイユ体制が確立した直後に連続した事件である。これらは相互には無関係ではありえず、また関係者たちは相互に知識を得てもいた。アジアに帝国主義体制の確立した段階で、それへの叛逆という姿勢においてこの時期計らずも「アジアはひとつ」という被抑圧民族意識の連帯が成立した。あくまで私見だが、多国間を横



■08 Buitenzorg Botanic Garden

断してこの話題でセッションを設けることもできたはず。だがこの間、国内で公務繁忙に追われた筆者には、とてもAASに自分で提案を出すだけの余裕がなかったことも悔やまれる。もっとも昨年インドとバンガラシュの学会に招かれ、その場で柳宗悦の言説なども動員しつつ、そうした見解を公けに述べる機会ももてたのだが。

296: Beyond Borders, Behind Mask:
Uncovering Life in Transnational
Manchukuo

国家規模の領土篡奪という陸の海賊行為が植民地経営の一端をなす。すでに「海域アジア」でみたとおり、実際には自由の場所であったはずの海洋を通路として、まずは港湾での利権を手中に収め、ついで内陸へと進出することで陸の側の宗主権を奪うのが、内陸ロシアを除けば、

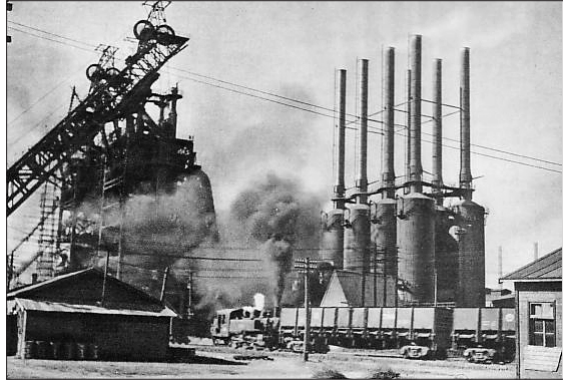


■09 駱賓基 Luo Binji (1917-1944)

西側世界列強によるアメリカ、アフリカそしてアジア植民地化の定石であり、その尻馬に載って満洲に進出し、軍閥乱立に乗じた謀略の末、中華民国やソ連と衝突することになるのが、大日本帝国の近代である。この話題についても複数のセッションが見受けられたが、時間の都合で、本パネルに出席してみた。大上段に構えた国際政治史の次元を超え、むしろその細部において人々の生活に何が発生していたかを、多言語・多領域に渡って議論するパネルであり、極めて充実した発表が相次ぎ、発表者とも閉会后、意見交換を楽しんだ。

まずEd. Pulfordが中国の作家で間島地域、現在の延辺朝鮮民族自治区に属する琿春で活動した、駱賓基Luo Binji (1917-1994) ■09の小説『辺陞線上』(1939)を取り上げた。「偽」満洲国と朝鮮との国境に位置する豆満江(中国では図們江)沿いのこの地域では、漢族の入植者と朝鮮族の住民との間に絶えず緊張があり、およそ統一した抗日戦線など神話に過ぎなかった。その反面、満洲国が謳う民族共和国はもまた、為政者側の主張する画餅にすぎなかった。そうした現実が「辺陞」つまり国境の線上の町の日常として赤裸々に描写される。つづくJoseph Seeleyは白頭山(中国では長白山)に淵源を發して黄海にそそぐ鴨緑江Yaluに舞台を移し、「韓満一体」の標語とは裏腹に、この国境地帯で密輸や国境紛争が頻発していた事実を暴露する。実際、日本に併合された朝鮮と満洲国との国境線は鴨緑江の中央に引かれていたが、これでは沿岸の漁民たちのあいだで漁場権について諍いが発生するのは当然だろう。さらに安東から奉天への鉄道である安奉線は、森林地帯の広葉

■10 鞍山製鉄所

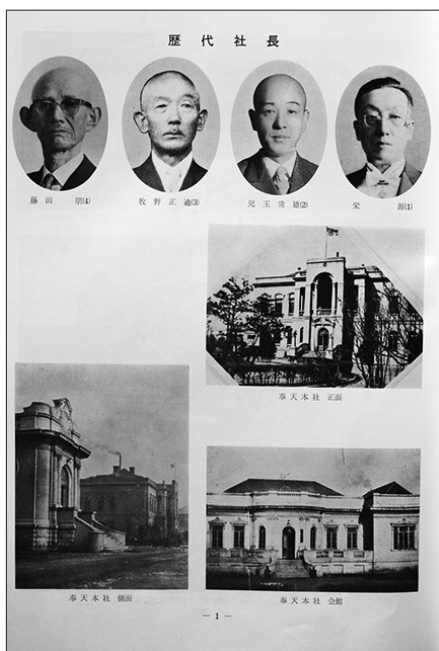


樹の材木ほかを鴨緑江河口から満洲北部へ運ぶ幹線。中国側の安東Andonは右岸、朝鮮側の新義州Sinuijuは左岸だが、国境を跨ぐ鉄道橋と税関の周辺では、婦女子を含む朝鮮側からの生活物資の密輸が日常茶飯であり、それに取材した悲話は朝鮮側の左翼プロレタリアート文学にも素材を提供していた。満洲側と朝鮮側の官憲同志が、共に日本人なのに相手側の国境管理の不備を非難し、咎を相手側に擦り付ける応酬合戦も、双方の公文書に記録が残る。公式統計に残る範囲でも、1932年の満洲国成立時点では、年間1200件、1935年になると6200件を超える密輸摘発が報告されている。日本の植民地支配は、一枚岩からはほど遠く、建前としての主権尊重は、国境地帯の現場に時に滑稽で笑止千万な混乱をすらもたらしていた。

さらにKoji Hirataは昭和鉄工の鞍山製鉄所■10に焦点を絞り、満洲における重工業の展開を跡付けた。いうまでもなく、1933年の経済建設綱領、37年の産業開発5か年計画はソ連の計画統制経済に模範を仰いだものであった。統計を見ても37年を100とした場合、昭和鉄工関連の生産高は、戦争末期の米軍の空襲に至る直

前の1944年段階の統計では、粗鋼生産や製鉄で200、電力生産では270を数える発展を見せている。中華民国側も重慶の「自由中国」に資源委員会を設置し、大渡口鋼鉄廠などで重工業化に邁進する。しかし両者を比較すれば、同年の満洲での生産は、粗鋼で中国全体の90%、電力で67%、石炭で49%といった数字を記録しており、解放後、人民中国成立後の1952年を見ても、中国全体のうち鉄鋼の70%、電力の41%、セメントの39%、石炭の33%は満洲地域での生産であり、そのなかでも鞍山鋼鉄会社が枢要な地位を誇っていたことは、当時の記録からも確認できる。蒋介石政権が福建や上海などの金融資本に頼ったのに対し、満洲を制圧した共産党が大陸での勝利を獲得した背景に、これら日本起源の重工業工場の掌握があったことも、広く知られていよう。共産党人民中国は「偽」満洲国の経済遺産に肩車して離陸を果たした。

最後にKathy Meyerは知られざる満洲航空■11の実態について、元パイロットほか関係者の記録証言や残された資料から卓抜な話術による物語を紡ぎ出した。「満空」の中心人物となったのは児玉常雄(1884-1949)。児玉源太郎の四男である。



■11 満航会『満州航空史話』（昭和47年）より

民間航空路を開設し、白頭山や承德離宮上空の遊覧飛行を提供する一方、満空は阿片の密輸にも関与していたという。承德を中心とする熱河は罌粟の栽培と阿片の生産でも知られていたが、1932年の関東軍による熱河作戦が始まると、熱河都統だった湯玉麟（Tāng Yùlín, 1871-1937）は金銀財宝やアヘンを車両に積んで天津租界へ脱出したと伝えられる。これに続く塘沽停戦協定Tanggu Truce成立（1933）以降、非武装地帯での阿片生産が目に見えて増大する。スパイ小説さながらだが、天津から朝、張家口に飛び、阿片を積み込み済南で燃料補給のうえ上海に日帰りで運送する航路が知られる。この違法行為に、満空の民間旅客航空機が秘密裏に利用されていた。背後には、満蒙を一体とみる冀東防共自治政府の地理認識があり、阿片もこの「傀儡政府」の資金源であり、華北以南の中華民国の金融体制に

打撃を与える方策でもあった。（広中一成「冀東政権の財政とアヘン専売制度」『現代中国研究』28号、71-91頁）。関与した満州航空の人物としては河井田義匡の日記が知られている。蒙古の徳王Дэмчигдонров=Demchigdonrov-Dé Wángらの独立運動がここに絡まるが、その率いる蒙古軍は綏遠事件（1936）で傅作義（Fù Zuòyì: 1895-1974）に撃退され、日本は華北を占領する……。

組織者のDan Shaoは議論を周到に集約し、時代区分、国境、経済活動いずれを見ても、満洲国はその前後ないし外部から隔絶しているというよりは、むしろ連続を閲しており、その境界線上での交易に鍊金術めいた術策がめぐらされていた、と巧みに要約した。そして駱賓基の小説にも密輸への言及あるいは間島のバルチザン英雄神話の虚構や倒錯をえぐるような描写はあるのか？ 安東周辺の密輸に地域の日本官憲はどのように関与したのか？ 30年代の経済統制と計画経済にあって、ソ連や満洲国の事例は、北米のニューデールと果たしてどこまで異質なのか？ 満洲における阿片政策には福利衛生改善と軍による資金調達とで矛盾が孕まれていたのではないのか？ の4点に限定し、発表者と議論を試みた。満空とAir Americaとの比較からは、北米合州国における強固な産軍共同体制も露わになるだろう。同一時刻には並行して、318: Resource management, Global market, and the making of Modern Manchuria (Northeast China), さらに、翌日朝には355: This Land of Ours: Property Rights, Territoriality, and Imperial Rivalries in Northeast Asia, 1880-1945 と題するパネルも用意されていて、満洲

地域に関する帝国主義政策の実態に対する学術的関心の高まりを証する。

3月24日 Day Four

324: Toward an Interregional History:
Comparing the Littoral-Scapes of Piracy
in Early Modern and Modern Asia

最終日朝のセッションにも中国沿岸の海賊に関するパネルがあり、聴きにいった。海賊の多発を体制の脆弱性の結果と見做す通常の認識とは一線を画し、アジア各地の異なった時代を比較考量することから、沿岸地域の光景の認識を一新しようとの意欲を示す企画である。ただしインド西岸における18世紀の海賊事例報告を予定していたLakshmi Subramanianは欠席。Gary Lukが阿片戦争 (Opium War, 1839-1841) 前後の30年間にわたる海賊と清朝と英国三つ巴の力の均衡を説くが、海賊行為の消長を分析する数量的な扱いがやや抽象的。阿片撲滅運動によって海賊を征伐すると、そのため失職した連中がかえって盗賊行為に加担するという悪循環が、阿片戦争直前の1838年の段階で広東の公文書に残されている。Jennifer Gaynor は *Intertidal History in Island Southeast Asia* (Cornell University Press, 2016) の著者だが、バンダ海を中心とする島嶼地帯社会の海賊の様相を分析。Tome Piresの *Suma Oriental* に見られる記述と現地のマレー語による記述がどう対応し、いかなる船舶や地名を指しているのか、など精緻だが錯綜した分析で、前提を共有できない門外漢には把握困難。三番手のRobert Antonyは広州の珠江で舟を住居とする蛋民や広州花船の売春業、鄭一嫂 (石香姑)、あるいはマカオを根拠とし「澳門海盜女王」と呼ばれた頼財山に代

表される女海賊 (Terryとしても脚色されるが、Fan Tanとして、マーロン・ブランドが映画化を試みて途中で死去)、さらには媽祖信仰に言い及ぶ。陰陽五行説によれば川が陽に対して、海は陰にして女性の領域との認識があり、それは陸の男性支配とは対極をなす、と海賊の女性的性格を強調。これらの傑物女海賊を主人公とする映画やアニメは、導演・蔣国清、主演・李元霸の映画『怒海俠盜』 *Angry Sea and Good Pirates* ■12や蔡牽媽の漫画など、絶大な人気を誇って量産中。発表者はそこに「水神としての女性」「海を生業とする彪悍なる女性」「儒教道徳を脱臼させる非伝統的女性」の姿を抽出する。彼女らの活動領域は香港・澳門から海南島周辺の沿岸島嶼部、ヴェトナム国境にまで広がる。第二次世界大戦期から敗戦後にも、これら入江を無数に隠した岩礁は海賊たちの巢窟となり、日本軍の特殊部隊が河内 (ハノイ) や安南への武器弾薬密輸経路に利したことも知られている。



■12 『怒海俠盜』 *Angry Sea and Good Pirates*

総じて、排除すべき反秩序としての海賊像とは異なり、アジアの島嶼社会や文化を理解するうえで海賊という存在の重要性を確認しようとするパネルだったと要約できようか。討論者のRobert Hellyerは阿片戦争期の清朝と英国との共犯あるいは共謀性、海の民の放牧性、東南アジアの島嶼における東インド会社とマカサル海賊との抗争と奴隷貿易との関係、そもそも「海賊」piracyという性格規定は有効か？そして阿片戦争後、汽船が海賊船に変装した事例、組織暴力団syndicateと海賊集団との関係、などを質問した。とりわけ銀と阿片との違法な兌換は、闇市場の機構と結託しており、経済史や金融史のうえでも重要な問題だろう。満洲国や冀東臨時政府の阿片密売が、その延長上に出現するからだ。

378: Writing With, Not About: Cats and Dogs, Horses and Rabbits (and Some Radiation) in Japanese Fiction

日曜日午前の最終日。面食らう題名だが、動物について、ではなく、動物とともに書く姿勢を貫く日本国籍作家やそれへの批評家を取り上げ、動物を人格化したり、隠喩扱いにしたりする誘惑を峻拒する虚構世界から何が可能となるかを探る試み。座長のDoug Slaymakerは古川日出夫の『ベルカ吠えないのか』『馬たちよ、それでも光は無知で』『あるいは修羅の十億年』などの作品の英訳者。柴田元幸の絶賛なども背景にある由だが、発表は早口で音響も悪く聞き取れない。3番手のMargarita Longは小林エリカの『マダム・キュリーと朝食を』(2014) ■13, 最後のDavid Hollowayは金井美恵子『兎』(1979)。最後の発表には榊敦子が



■13 小林エリカ『マダム・キュリーと朝食を』

意見を開陳し、Sharalyne Orbaughも質問を発したが、どうも議論が噛み合わない印象。概して現代小説の作品論や分析はネタバレとなったり、出来合いの理論を無理に当て嵌めたり、はたまた論者の主観の押し付けとなったりしがちで、筆者は敬遠するが多い。だが2番手の菅啓次郎が『犬になった少女』(挿絵を見た記憶のある読者も多いはず)を手がかりに、古典的なフランス的文章作法と、彫琢ある哲学的文体をもって見事な英文で議論を展開した(この点、今回聴取した発表中で随一)。原文あるいは日本語訳(に直すと却って常識的?)も、早晚出版されようから、無味乾燥な内容要約は慎もう。

時間切れだったが、空中分解気味のパネルをなんとか纏めたくて質問してみた。菅啓次郎は日本社会の純粋国粋志向の虚偽を、虚構の「純血種」秋田犬たる忠犬ハチ公を例に指弾した。一方他の3名の

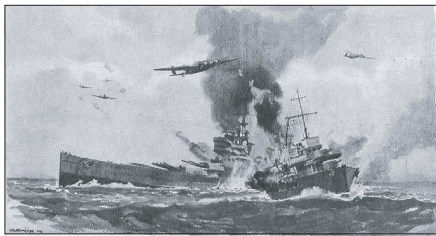
論者はいずれもフクシマ以降の核物質汚染を話題とした。ここに純粹幻想の裏面としての汚濁という構造が浮き彫りになるが、両者をいわば弁証法的に止揚する（わざと時代遅れのマルクス主義用語を用いた挑発）手立てはないのか？ スガサンはjoint struggle with animalを最後に提唱したが、そこに具体的にいかなる戦術を想定しているのか？ 古川日出夫の『あるいは修羅の…』には粘菌Slime Moldが登場するが、日本に生態学ecologyの用語を導入した粘菌学者、南方熊楠は森の不純物や汚染を動物のように捕食し、食べ尽くすことで環境を純化する機能を、この半動物で分類不能の茸類に託した。宮崎駿の『ナウシカ』に登場する生物化学兵器たる巨大粘菌の発想源も、熊楠に他ならなかったはず？ これが当方の目論む「止揚」計画案だったが、無論、誘導尋問は奏功せず、このあたりで時間切れ。あとで菅と脇台詞で「なかなかうまくゆかないネ」と慰めあった。

いささかフラストがたまったので、散会后、壇上に接近し、Davidには同時代の金井が蓮實重彦とお互いゲラ原稿を交換して校正していた件を告げ、またペットを家族が食べてしまうプロットは岡崎京子のワニを飼う売春少女の物語にも飛び火しているのでは、などと感想。またMargaritaには小林エリカの亡き父が著名な自然科学者であり、エリカのキュリー夫人母娘に対する感情にもそれが転移しており、放射能に対する彼女の態度にも肯定否定の両面が相克していて、それが語り手の兎の姿にも投影されているのでは、などの愚問を提示してみた。聞けばおふたりとも、作家ご本人には会ったことがないという。それでは、というので、

要らぬお節介に及ぶ。デンヴァーの隣町ボウルダーにはかつて海軍の日本語学校があり、そこを卒業したドナルド・キーンやエドワード・サンデンステッカーは、遠慮なく川端や谷崎や三島に接近しましたよ、お二人にも奮起に期待します、と。

隣室では大阪大学からStanfordに出世したLinda Galvane主催のパネル377: The Excreting Female Bodies in and of Japanese Literatureが併設されていて、こちらも排泄物汚染問題である。プログラムからは脱落していたが、伊藤比呂美がここに出演し自作の詩を朗読した。出口で偶然にバッタリと鉢合わせしたが、相手は30年も前にパリで会った当方の顔など覚えてはおられない。共通の友人である詩人のジェフリー・アングレスのカラズーの家の来客用寝台で比呂美サンの一週間後に同床の経験あり、という得意の話題を繰り出すと、アレマ誰かと思ったら、という顔付きになる。旧懷を叙すのも束の間、別の面会予定ゆえ一向に分かれを告げた。だが思わぬ旧知に出くわし、オジャベリに夢中になったため、うっかり会場に私物を置き忘れた。いろいろと書き込みをしたメモ帳で、これが無事回収できなかったら、ここまで延々と綴った駄文の本報告も、書き残すことは能わなかったはずだ。翌日からは、先ほど記したコロラド大学ボウルダー校に移動、図書館特別資料閲覧室で、海軍日本語学校関係の一次資料を調査し、東アジア部門担当司書と面談、同校東アジア研究センターの皆様と国際日本研究Consortium構想に関する意見交換などの公務が始まる。文書系のヴェテラン、David Hayesの懇切な指示に従い、軍

学校卒業生Robert Stuart Hummelの
在学中の日記 (Sep.01, 1941-Oct.16, 1942) に目



■14 村上松次郎《マレー沖海戦》

を通す。海洋覇権の実際がday by day
の記述から立ち上がり、真珠湾からマレー
沖海戦■14の悪夢が、ミッドウェー海戦
で顛倒するまでが刻々と綴られる。太平
洋の資源争奪戦とは、近代600年の世界
制覇という地球規模の大海賊行為にあっ
て、その終焉の開始を告げる結節点にほ
かならなかったはずである。

(京都, 2019年3月31日-4月2日)

編集雑記

謹告

本誌前号(247号)の朴
淳弘「郭仁植研究」(上)
において、すべてのルビ
を伴う人名の欠落など、
編集上の重大な誤りを生
じさせました。本号に同
稿の訂正版を再掲載し、
筆者ならびに読者の皆さ
まにお詫びいたします。

あいだの会

前号の他の訂正とお詫び

▲馬定延「言語の力」中、P.20
左段本文下から4行目「——やが
て親目転向する李光洙のように」
で「の」が重複しておりました。

訃報

関根伸夫(せきね のぶお)氏
美術家。5月13日、米ロサンジェ
ルス郊外で逝去。76歳。

▲埼玉県志木市の農家の生まれ。
色浅黒く、眼光鋭く。低音の口はど
ちらかといえば重いほう——早くか
ら「大物」の風格を漂わせていました。

▲70年前後、東野芳明氏が『中央
公論』の口絵連載で新進美術家たち
を紹介したとき、故人がジーパン姿
で登場していたのが印象的。「おお、
いよいよわれらの時代!」と思わさ
れたものです。

本江邦夫(もとえ くにお)氏
美術史家、美術評論家、多摩美術
大学名誉教授。6月3日、心筋梗塞の
ため急逝。70歳。

▲東京国立近代美術館を経て多摩
美大へ。その間、府中市美術館館長
やVOCA展などの公募展の審査員も
務めた。いわば一直線のキャリア。

▲遺著となった『多摩美大学と私
一九九八—二〇一九』(同大、非売品)
によると、ルドンで卒論、ゴーガン
で修論を書き、後期印象派を「専門」
とする東京近現代の故人にとって
「救い」となったのが、＜歴史と社
会を批判的に見据えた新しいタイプ
の美術、つまり「現代美術」でした＞。

▲その「現代美術」については多
くを語っていないが、＜私たちはい
まだに一九世紀末のパラダイムを生
きている、というのが私の持論です＞。

桜井 武(さくらい たけし)氏
熊本市現代美術館館長。6月4日逝
去。75歳。

▲「プリティッシュ・カウンシル」
の仕組みや活動が日本でまだまだ
知られていないころ、アート担当官
として長らく勤務されていた(1971-
2004)。(F/20190619)

年間定期購読の ご案内

年間定期購読をご希望の方は、購読料 5,280円(12号/誌代3,600円+郵送料1,680円)を
郵便振替でお振り込み下さい。事務局にご連絡をいただければ専用の振替用紙をお送りい
たしますが、郵便局からお振り込みの際は、備え付けの青い振替用紙に、振替口座番号を
007900-25128、加入者名を『あいだ』の会とご記入下さい。本誌は、書店でのお取り扱
いは致しておりませんので、既刊号をお求めの方も、お手数ですが事務局にご連絡をお願い
申し上げます。また、既刊号の目次は、下記のホームページにてご覧いただけます。なお、
本誌の用紙は中性紙です。

月刊『あいだ』248号

編集=福住治夫 誌面設計=穂葉さり 印刷=石橋 大 制作管理=新倉美佳 藤江 民
製本=このあいだ社中 誌面設計 客員=鳥山 晋

発行=『あいだ』の会

〒179-0072 東京都練馬区光が丘2-7-4-1008 Tel/Fax 03-3976-7203
http://gekkan-aida.rgr.jp/ mail address : info@gekkan-aida.rgr.jp